

「二」次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

ワグナーに心酔していたニーチェが、ビゼーの『カルメ
ン』を聴いて、にわかになワグナー攻撃へと転じ、「快活な
知性」Gaya Scienzaの守護者として生まれかわったことは
知られている。ゲルマン民族の①しかつめらしさは、陰鬱
なだけではなく、やましさと、うらみがましさを投影にす
ぎないと知ったときの、ニーチェの飛翔ぶりから、ひとは
多くのことを学びうるし、実際に多くを学んできたように
思う。しかし、それならば、マゾツホが書きのこした次の
一節は、いったい何を意味するだろう。

われわれ東方の民は、ゲルマン民族が距たるよりもさら
に遠く、アラテン民族の快活さから距てられている。イゲ
ルマン人の生真面目さも、スラヴ人のもとではウメランコ
リーと宿命論になりかわってしまふのだ。

(『残酷な女たち』福井信雄訳)

問二

傍線部①の語の用例として、適切でないものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 結婚式でしかつめらしい祝辞が続くのにうんざりした
- 2 しかつめらしい注意喚起ではメッセージが伝わらない
- 3 不機嫌な気持ちを示すようなしかつめらしい顔をした
- 4 しかつめらしい表情を浮かべているが本心は窺えない

マゾツホは、「ここ」に言う東方の民の生命原理から、一度たりとも目をそらしたことがない、きわめて土着的なスラヴ作家であった。小ロシアとも呼ばれる、ウクライナの片隅に生まれ、独特の環境に育まれた彼は、十二歳でこの土地を去って西へ向かい、プラハを経て、オーストリアの誇るドイツ語作家として、諸外国で名声を得るに至ってから、一八九五年にフランクフルト近郊の小村で生涯を終えるまでのあいだ、小説を通し、絶えずキョウウ^aリへとたちかえる努力を惜しんだりしなかった。風に波うつ一面の草原。上空を横切る野鳥の列。平原に点在するフン^bボのたたずまい。闇を裂いて聞こえるアイ^cシュウをおびた調べ。遠くを横切る馬のひづめの音。そして、夜通し収穫にいそしむ農民たちの歌声。そうした遠い反響のなかで、「⁷」は、彼の生活信条の一部でさえあった。

わたしは、小ロシアの民から、黙して忍び、エ不屈の根性で戦うことを学んで、おかげで、何ひとつ克服しえぬものなどなかった。

問一

傍線部①～⑤の漢字と同じ漢字を含むものを、次の各項の中からそれぞれ選び、その番号をマークせよ。

①

1 ヒヨウリ一体

2 復興へのリテイ標

3 セイリ食塩水

4 閲覧リレキの削除

②

1 ケイボの念を抱く

2 ハクボに溶ける風景

3 ボキンに協力する

4 ボゼンで手を合わせる

問一

傍線部①～④の漢字と同じ漢字を含むものを、次の各項の中からそれぞれ選び、その番号をマークせよ。

①

1 バンシユウの候

2 ユウシユウの色を浮かべる

3 バンシユウを改める

4 ガンシユウの色を浮かべる

問三 空欄

7

に入る言葉として、最も適切なものを波線

部ア～エの中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 ア ラテン民族の快活さ
- 2 イ ゲルマン人の生真面目さ
- 3 ウ メランコリーと宿命論
- 4 エ 不屈の根性

②メランコリーは、力である。メランコリーの力を借りなければ生きられないということが、人間にはある。見るからに受動的で、ほとんど無気力の等価物として受けとめられがちな、この抑鬱的な心理には、みかけによらず積極的な、能動的な作用が認められてしかるべきだ。

いかなる苦痛にも耐え、それがわれわれの生命にとって、危険なものであるということをし、一時的にであれ頭から忘れさせ、そうやって苦痛をのりこえ、やりすごすとは、いかにマゾヒストの信条としてふさわしい。それは、トルストイがロシアの農民のあいだに発見した強靱さにつながるし、「スラヴ＝奴隷」*sclavus*の「ドウ④」*ド*をいっそうまことしやかに見せもするだろう。それは、犬ころか、やせ馬もどきの人生を、宿命として受け入れる、非好戦的な精神の表現に他ならないからだ。しかし、それも、逆に言えば、ふてぶてしさとして、人の眼に映ることがないではないのである。たとえば、犬でも、馬でも、さらには虫でもいっこうに構わないが、いわゆる動物たちは、人間に比べて、はるかに無感動であるぶん、ふてぶてしく見えはしないだろうか。

問四 傍線部②の説明として、最も適切なものを次の中から
選び、その番号をマークせよ。

- 1 メランコリーによって無気力に陥ってしまうことがあつても、人間にはそれを乗り越えていく力がある
- 2 メランコリーの危険性を忘れることができれば、それはむしろ強靱な生命力をもたらし原動力ともなる
- 3 メランコリーは抑鬱的な心理だと思われているが、逆に能動的な行動を引き起こす精神にさえなりうる
- 4 メランコリーは生が避けるべき死の原理ではなく、苦痛とともに生きる人間の生の形式そのものである

問一

傍線部①～⑤の漢字と同じ漢字を含むものを、次の各項の中からそれぞれ選び、その番号をマークせよ。

④

- 1 原野をカイコンする
- 2 ヒンコンを極める
- 3 疫病をコンゼツする
- 4 コンメイを深める

彼らは、③ いわゆる苦痛に対しては、人間よりもはるかに通じている。 彼らもまた苦痛に身をよじることがある。

ミミズを踏んでみればわかることだが、そのバネのきいた悶絶には、おそらく「サルダナパロスの死」の女体のよじれでさえかなわない凄絶さがある。しかし、その反面、動物たちは、死にも、メランコリーにも全身をあずけてしまえる強靱な意志の力によって、われわれを圧倒する。彼らは同類が死んでゆくさまを、無感動にやりすぎし、その死骸のうえを、場合によっては踏みこえてゆくことさえなしとはしない。人間にあてはめるなら、申し分なく 10 の魂だ。われわれは、動物たちから学ぶべき点が少ないはずである。

問五 傍線部③の説明として、最も適切なものを次の中から
選び、その番号をマークせよ。

- 1 苦痛に対する強靱な意志によって人間を圧倒する
- 2 感動に乏しく人間より苦痛を感じずに済んでいる
- 3 無感動に見えながら人間以上に苦痛を知っている
- 4 人間に比べてふてぶてしく苦痛を耐え忍んでいる

問六 空欄

10

に入る言葉として、最も適切なものを次の

中から選び、その番号をマークせよ。

1 独裁者

2 アスリート

3 宗教家

4 戦士

苦痛を退けることが人間の心理であり、人間の④貴族主義の根拠であるのなら、たしかに、マゾヒズムは、けだものじみているように見える。人間の尊厳を重んじるものたちに限って、メランコリーだの、マゾヒズムに対しては、きわめて冷淡にできている。たとえば、「快感原則」を起点にして、精神現象の記述に踏みだしたフロイトは、あるとき、とうとう困惑まじりの口調で、こんなふうと言った。

人間の欲動の営みにマゾヒズム的な傾向が存在することは、経済的にいって不可解だというのはもっともなことである。なぜなら快感原則が、不安の回避と快感の獲得をその第一目標とする形で心的諸事象を支配しているとすれば、マゾヒズムは理解しがたいものだからである。もし苦痛や不快がもはや警告ではなくて、それ自体目的となりうるとすれば、快感原則の面目は丸潰れとなり、われわれの心の営みの番人は、いわば麻酔をかけられてしまっていることになる。マゾヒズムの反対物のサディズムは決してそうではないのに、「マゾヒズムは、われわれの欲動理論にとって大きな脅威を意味しているように思われる。

問七

傍線部④はこの場合どういうことか。最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 人間が野蛮な動物たちを上まわる生命力を有していると信じる態度
- 2 人間を他の動物よりも生来的に優れた特権的な存在だと考える立場
- 3 動物を軽蔑して人間の傲慢を省みない特権階級に属する人々の考え

- 4 動物たちの苦痛を想像もせず優雅な暮らしにふける人間中心主義

われわれは、従来、動物たちを軽蔑するのと同じか、あるいはそれ以上に、メラニコリーをおとしめてきはしなかつたか。それは、病気であり、倒錯であり、罪にまつわるやましさの一種であるかの如く考えてきはしなかつたか。まるでそれが健全な生を阻害する病原菌に満ちたものであるかのごとくふるまってきたきはしなかつたか。いや、白状してよければ、われわれは、生そのものを阻害する死の原理の如く、メラニコリーを考えてきたような気がする。それが習わしであった。われわれが動物を、自分たちより低い地位におとしめようとしてきたのも、彼ら動物の生命カにとって根本的であるはずのメラニコリーに対し、われわれが敬意を欠いてきたことのあかしなのである。

フロイトは、「この種の脅威と絶えず背中合わせに生きていたと言つてよいと思う。「快感原則」というたてまえが、音を立てて崩れおちていく光景に怯え、急場を凌ぐうとするフロイトの姿には、悲壮感が漂っている。このあと、フロイトは、「死欲動」だの、「超自我」だのをよりどころに、理論の再構築を試みることになるのだが、マゾヒズムが一般に喚起する狼狽を、彼は、この一文でみごとにつかまえている。感覚にうるさい貴族のなりを装った人間が、囃らずも露呈させてしまう奴隷根性。マゾヒズムとメランコリーは、この意味において同じ穴のむじなである。ただ、フロイトの限界は、メランコリーを、あくまでも喪失感だの、ザイ⑤セキ感情だのとしてとりまとめずにはおれない⑤融通のなさにあらわれている。メランコリーに関してだけ言うなら、フロイトのしち面倒くさい理論的説明より、ダランベールの次の定義の方が、はるかにすっきりしていて気持ちがいい。

問一

傍線部①～⑤の漢字と同じ漢字を含むものを、次の各項の中からそれぞれ選び、その番号をマークせよ。

⑤

- 1 ショクセキを果たす
- 2 コセキ抄本
- 3 移民をハイセキする
- 4 アイセキの念

問八 傍線部⑤は何を指して言われているか。最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 快感原則という仮説が崩れてもなおフロイトがメランコリーに対する考えを根本から改めようとしなかったこと
- 2 メランコリーに関してフロイトがしつこく理論的説明を繰り返しつつもすっきりとした考えに至らないこと
- 3 マゾヒズムとメランコリーが同じ穴のむじなであるということ
実をフロイトが頑として認めようとしなかったこと
- 4 フロイトが自らの狼狽を隠すようにして理論の再構築を試みる説明の中にこそ彼の限界が見えてしまうこと

人間には、苦痛をやりすぎず手立てが二つある。メランコリーと死が、それだ。（『リットレ仏語大辞典』）

現実の苦痛に周囲を包囲された日常のなかで、メランコリーは、ひよっとして、われわれにとって生の唯一の形式ではないだろうか。生は苦痛を駆逐する体制からなっていないのではない。生は苦痛に耐え、それを克服する装置であるにすぎないのだ。確かに、フロイトが言うように、人間は生きていくうちから死の予行演習を繰り返すかもしれない。なるほど、メランコリーは死に似ていないではない。しかし、それは死がメランコリーに酷似しているというだけの話ではないか。苦痛をやりすぎず方法としての死は、メランコリーが極まったその結果にすぎない。生半可な死として、メランコリーが生きているあいだからわれわれを飼いならし、思わせぶりに死を垣間見させるわけではないのである。

メランコリーなり、マゾヒズムなりを、生から切りはなすしか能のない理論とは縁を切ること。フロイトを用いなければ、マゾヒズムを理解しえないという時代は終わった。いや、はじめからそんな時代は、一度も訪れなかったのである。

問九 本文の内容と合致しないものを、次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 苦痛を退けて快感を求めることが人間の心理だとする考えによつては生のあり方を捉えられない
- 2 いかなる苦痛をも宿命として受け入れるマゾヒズムは病氣でも倒錯でもなく生から切り離せない
- 3 動物たちにとって生命力の根本にあるのは苦痛をやりすぎず手立てとしてのメランコリーである
- 4 メランコリーは人間にとって死の苦痛を耐えるための予行演習として積極的な意味を持っている

「二次の文章を読んで、後の問いに答えよ。」

わぎもこが来べきよひなり 1 蜘蛛のふるまひかね
てしるしも

これは、近江の国にありけるア郡司のむすめ、ことこのほかに、容姿のよくて、ひかりの、ころもを通りて、めでたきよしを、イみかど聞こし召しければ、①たてまつりけるを、限りなくおぼしめして、世のまつりごととも、せさせ給はざりければ、ウ親思ふ所ありて、よにおそりて、召こめて、はるかなる所に、こめ据ゑたりけるを聞こし召して、たびたび、召しにつかはしたりけれど、参らせざりければ、エかしこかりける人を召して、使につかはすとて、「必ず具して参れ。もし、具して参らずは、罪せむ」と、仰せられければ、ほしいひを、すこし懷中に持たりける。

問一

空欄 に入る言葉として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 あさつゆの
- 2 ひさかたの
- 3 たまのをの
- 4 ささがにの

問二

傍線部①の動作主として、最も適切な人物を波線部ア～エの中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 ア 郡司のむすめ
- 2 イ みかど
- 3 ウ 親
- 4 エ かしこかりける人

かの女の、もとに行きて、「速やかに参り給へ、といふ宣旨の使なり。されど、さきざきのやうに参り給はじ。参り給はずとて、帰り参りたらば、必ず首を召されなむと

3

。いかにも、死なむ事はおなじ事なれば、ただ、この庭にて死なむ」とて、物もいはで、十日ばかり、庭にふして、みそかに、ふところに持たりける、ほしいひを食ひてありけるを、

問三

空欄 に入る言葉として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 せよ
- 2 す
- 3 する
- 4 すれ

「この事ふびんなり。②宣旨の使、ここにて死なば、却りて罪かうぶりなむ。はや、この使につきて、参りね」と、親のいひければ、「我は、もとより 5 とも思はず。親のとりにむればこそ参らね」といひて、使に具して参りぬ。うちにとどまりて、「まづさきだちて、参りたる由申さむ」といひければ、そのよし申したてまつりて、待ちける程に、蜘蛛といへる虫の、上よりさがりて、袖のうへにかかりたりけるを見て、「行幸などもやあらむずらむと、③あやしき事のあるなり」と申しける程に、みかど、おはしましたりけるとぞ。衣通姫と申す歌よみは、これなり。住吉に、べちの神にておはしますとぞ、うけたまはる。

(『俊頼髓脳』による)

問四

傍線部②の意味内容として、最も適切なものを次の中から選
び、その番号をマークせよ。

- 1 勅命の使者がここで死んだので、予想に反して我々が罪を
着せられるだろう
- 2 勅命の使者がこの家で死んだりすれば、むしろ我々が罪
を受けらるだろう
- 3 勅命の使者は、娘がここで死んだので、逆に罪をかぶるこ
とになるだろう
- 4 勅命の使者は、もし娘がこの家で死んだら、かえって罪に
問われるだろう

問五

空欄 に入る言葉として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 参りたし
- 2 参らじ
- 3 参りたまふ
- 4 参らむ

問六

傍線部③の指す内容として、最も適切なものを次の中から選
び、その番号をマークせよ。

- 1 使者につき従って戻ってきたこと
- 2 袖の上に蜘蛛が降りてきたこと
- 3 参上したままそこで待っていること
- 4 わざわざ家まで訪ねてくること

問七

本文に登場する「蜘蛛」は何を示すか。最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 待ち人が来る前兆
- 2 凶事が起きる予兆
- 3 長寿と子孫の繁栄
- 4 人間の営みのはかなさ

問八

本文の内容と合致しないものを、次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 帝は郡司の娘をこのうえなく寵愛したがために政治がおろそかになった
- 2 使者は決死の覚悟を告げたものの、密かに干米を食べて身を保っていた
- 3 娘が使いと共に戻らず実家に留まったままなので、帝が自ら迎えにいった
- 4 郡司の娘は、後に衣通姫と呼ばれる歌神として祭祀されることになった

「三」次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

①海が見たい、と私は切実に思った。私には、わたるべき海があつた。そして、その海の最初の渚と私を、三千キロにわたる草原(ステップ)と凍土(ツンドラ)がへだてていた。望郷の想いをその渚へ、私は限らざるをえなかつた。空ともいえ、風ともいえるものは、そこで絶句するであろう。想念がたどりうるのは、かろうじてその際までであつた。海をわたるには、なによりも海を見なければならなかつたのである。

すべての距離は、それをこえる時間に換算される。しかし②海と私をへだてる距離は、換算を禁じられた距離であつた。それが禁じられたとき、海は水滴の集合から、石のような物質へ変貌した。海の変貌には、いうまでもなく私自身の変貌が対応している。

私が海を恋うたのは、それが初めではない。だが、一九四九年夏カラガンダの刑務所で、号泣に近い思慕を海にかけたとき、海は私にとって、実在する最後の空間であり、その空間が石に変貌したとき、私は石に変貌せざるをえなかつたのである。

問一

傍線部①のように思った時期はいつか。最も適切なものを波線部ア～エの中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 ア 起訴と判決をはさむほぼふた月
- 2 イ 私がそのような心境に達したとき
- 3 ウ 一九五三年夏
- 4 エ 乗船までの六カ月間

問二

傍線部②の説明として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 海をこえるのに要する時間よりも、海までの距離の方がはるかに長いという二つと
- 2 想念がたどりうるのは、かろうじて海の際までで、海まで届かないという二つと
- 3 海から隔たった刑務所や収容所での抑留がいつまで続くか分からないという二つと
- 4 海との間に横たわる草原と凍土を踏破するのに必要な時間を読めないという二つと

だがそれはなによりも海であり、海であることでひたすらに招きよせる陥没であった。その向うの最初の岬よりも、その陥没の底を私は想った。海が始まり、そして終るところで陸が始まるだろう。始まった陸は、ついに終りを見ないであろう。陸が一度かぎりの陸でなければならなかったように、海は私にとって、一回かぎりの海であった。渡りおえてのち、さらに渡るはずのないものである。ただ一人も。それが日本海と名づけられた海である。ヤポンスコエ・モーレ（日本の海）。ロシアの地図にさえ、そう記された海である。

望郷のあてどをうしなったとき、陸は一挙に遠のき、海のみがその行手に残った。海であることにおいて、③それはほとんどひとつの倫理となったのである。

一九四九年二月、私はロシア共和国刑法五十八条六項によつて起訴され、二カ月後判決を受けた。起訴と判決を含む前後の経緯は、ほぼ次の通りである。一九四八年夏、私たち抑留者は南カザフスタンのアルマ・アタから北カザフスタンのカラガンダへ移され、同市郊外の一般捕虜収容所へ収容された。その直後から、目的不明の取調べが始まり、十四、五人程度の規模で、つきつぎに収容所から姿を消して行った。

問三

傍線部③はどのようなことか。最も適切なものを次の中から選
び、その番号をマークせよ。

- 1 正邪善悪の判断を下す際の道徳的基準となったということ
- 2 収容所内で人間の尊厳を保証する原理となったということ
- 3 絶望の中でかろうじて自身を支える観念となったということ
- 4 異国の土地で自国愛を保持し続ける象徴となったということ

(中略)

ア起訴と判決をはさむほほふた月を、私は独房へ放置された。とだえては昂ぶる思郷の想いが、すがりつくような望郷の願いに変ったのはこの期間である。朝夕の食事によつてかろうじて区切られた一日のくり返しの中かで、私の追憶は一挙に逆行した。望郷の、その初めの段階に私はあつた。この時期には、故国から私が「恋われている」という感覚がたえまなく私にあつた。事実そのようにして、私たちは多くの人に別れを告げて来たのである。そのとき以来、別離の姿勢のまま、その人たちは私たちのなかにあざやかに立ちつづけた。化石した姿のまま。

弦(つる)にかえる矢があつてはならぬ。おそらく私たちはそのようにして断ち切られ、放たれたはずであつた。私をそのときまでささえて来た、遠心と求心とのこのバランスをうたがいはじめたとき、いわば④錯誤としての望郷が、私にはじまつたといつていい。弦こそ矢筈(やはず)へかえるべきだという想いが、聞きわけのない怒りのように私にあつた。

問四

傍線部④はどういうことか。最も適切なものを次の中から選
び、その番号をマークせよ。

- 1 弦から放たれる矢の遠心力が、矢が弦へと戻る求心力を
上回り、バランスが崩れること
- 2 恨むべき取り引き相手はソビエト国家であるにもかかわら
ず、日本だと勘違いすること
- 3 こちらが帰郷を希求するのではなく、故国こそが帰郷を
望んでいるのだと考えること
- 4 昨日までの日本はもはや存在しないというのに、かつての
故国の有様を懐かしむこと

この錯誤には、いわば故国とのあいだのへ取り引きが つねにともなつた。私は自分の罪状がとるにたらぬものであることをしいて前提し、やがては無力で平穩な一市民として生活することを、くりかえし心に誓つた。事実私が一般捕虜とともにそれまですごして来た三年の歳月は（それは私にとって、事実上の未決期間であつた）、市井の片隅でひっそりといとなまれる、名もない凡庸な生活がいかにかけがえのないものであるかを、私に思いしらせた。しかもこのへ取り引きの相手は、当面の身柄の管理者であるソビエト国家ではなく、あくまで日本―おそらくそれは、すでに存在しない、きのうまでの日本であつたのであろうが―でなければならなかつたのである。

私たちは故国と、どのようにしても結ばれていなくてはならなかつた。しかもそれは、私たちの側からの希求であるとともに、へ向う側からの希求でなければならぬと、かたく私は考えた。望郷が招く錯誤のみなもとは、そこにあつた。そして私が、そのように考ええた時期は、海は二つの陸地のあいだで、ただ焦燥をたたえたままの、過渡的な空間として私にあつた。その空間をこえて「手繰られ」つつある自分を、なんとしてでも信じなければならなかつたのである。

(中略)

郷を怨ずるにちから尽きたとき、いわば⑤へ忘郷の時期が始まる。同年秋、かつて見ない大がかりな囚人護送(工タツプ)が開始され、ひと月後に私たちは東シベリヤの密林(タイガ)にはいった。「ついに忘れ去られた」という、とり返しのつかぬいたみは、当然の順序として私自身の側からの忘却をしいた。多くの囚人にたちまじる日本人を、へ同胞として見る目を私は失いつつあった。それは同時に、人間そのものへの関心、その関心の集約的な手段としての言葉を失って行く過程であった。

密林(タイガ)のただなかにあるとき、私はあきらかに人間をまきぞえにした自然のなかにあった。作業現場への朝夕の行きかえり、⑥私たちの行手に声もなく立ちふさがる樹木の群に、私はしばしば羨望の念をおぼえた。彼らは、忘れ去り、忘れ去られる自我なぞには、およそかわりなく生きていた。私が羨望したのは、まさにそのためであり、彼らが「自由である」ことのためでは毫もない。イ私がそのような心境に達したとき、望郷の想いはおのずと脱落した。

問五

傍線部⑤における筆者の状況として、適切でないものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 故国から忘れ去られた自己が、必然的に故国を忘れ去っていった
- 2 故国との結びつきが断ち切られ、〈同胞〉の意味が薄れていった
- 3 故国から忘れられ、捨てられたことへの恨みと痛みが昂じていった
- 4 人間そのものへの関心を失うことで、失語状態へ移行していった

問六

傍線部⑥の理由として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 過酷な状況下にあっても、樹木だけはその美しさで人に感動をもたらすから
- 2 樹木は失う言葉も持たず、あらゆるものに対して無関心に存在しているから
- 3 大地に根ざして、一歩もうつることをゆるされぬ樹木は、海を知らないから
- 4 樹木は收容所外の自然の中に存在し、強制労働が課せられることもないから

ウ一九五三年夏、ハバロフスクの日本人受刑者の一部は、ナホトカへ移動した。移動の目的は一切知らされなかった。ナホトカは私たちが帰国するための、ただひとつの窓口である。しかし私たちには、事態がどのように楽観的に見えるときでも、さいごまで疑ってみるという習性が身につけていた。

港湾にのぞむ丘の中腹に、私たちの収容所があった。そこはまだ海ではなかった。海でないという意味は、私たちはなお、のがれがたく管理されており、あずかり知らぬ意図によって、いつでも奥地へ引きもどされうる位置にあったからである。エ乗船までの六カ月間、私たちにおよそ安堵というものはなかった。私たちは受刑直前の状態に似た、小刻みな緊張と猜疑心に、さいごまでつきまとわれる運命にあった。到着後、ふたたび意図のわからぬ取調べが始まったことが、私たちの不安をさらにかきたてた。密告の常習者とおぼしい者が、なお密告を強要されているという噂が流れた。

十一月三十日早朝、ふつて湧いたように、「荷物をもて（ス・ベンチャーミ）」という命令が出た。とるにたらぬ荷物をかかえて広場に集合した私たちは、読みあげられる名簿の順に、構外に仕切られた建物へ移され、税関吏による所持品の検査を受けた。彼らの態度は、思いもよらず丁重であつたが、私たちを「返す」とは最後までいわなかつた。一時間後に何が起るのかもわからない緊張のなかで、まあたらしい防寒帽が支給された。それが、ソビエト政府からの、最後の支給品であつた。正午すぎ、收容所の窓からほぼ真下に見おろす位置に、一隻の客船が姿を現わした。それが興安丸であつた。戦慄に似た歓喜が、私の背すじを走つた。

夕方になつて、私たちの輸送が始まつた。トラックが到着するたびに、私たちはもう一度姓名を呼ばれ、トラックに分乗した。自分の姓名をあきららかに呼ばれるまで、私たちには、なお安堵はなかつた。そして、姓名を呼ばれた。

トラックは興安丸の大きな船腹へ、横づけになるようなかたちでとまった。トラックからおりた位置で、私たちは整列しかけた。最後の人員点検があるはずだと思ったからである。警備兵はしかしトラックをおりず、あそこだというように、船の中央部を指さした。私たちは瞬間とまどったのち、われがちに走り出していた。タラップの下には、引渡し責任者と見られる内務省の高官らしい人物が、目もくれずにタラップをかけ昇る一人一人に、手をあげてにこやかに会釈していた。

タラップをのぼり切ったところで、私たちは看護婦たちの花のような一団に迎えられた。「苦労さまでしたという予想もしない言葉をかきわけて、私は船内をひたすらにかけおりた。もっと奥へ、もっと下へ。いく重にもおれまがった階段をかけおりながら、私は涙をながしつづけた。いちばん深い船室へたどりついたと思ったとき、私は荷物を投げ出して、船室のたたみへ大の字にたおれた。

船が埠頭をはなれるまで、誰ひとり甲板へ出ようとはしなかった。最後にすがりついた畳の上に呆然とすわったまま、私は夜を明かした。

その翌朝、興安丸はナホトカの埠頭をはなれた。かろうじて安堵した私たちは、甲板へ出た。二十四時間の興奮と緊張のあと、私たちはただ疲れていた。揺れながら遠ざかるナホトカの港をながめながら、私はただ疲労しつづけた。

⑦一九五三年十二月一日、私は海へ出た。海を見ること
が、ひとつの渴仰である時期はすでに終りつつあった。湾と外洋をへだてるさいこの岬を船がまわったとき、私たちの視線はいつせいに外洋へ、南へ転じた。舷側をおもくなくぞる波浪からそれは、性急に水平線へ向った。これが海だ。私はなんども自分にいい聞かせた。

海。この虚脱。船が外洋へ出るや、私は海を喪失していた。まして陸も。これがあの海だろうかという失望とともに、ロシアの大地へ置き去るしかなかったものの、とりもどすすべのない重さを、そのときふたたび私は実感した。その重さを名づけるすべを私は知らないが、しいて名づけるなら、それは深い疲労であった。喪失に先立って、いやおうなしに私をおそう肉体の感覚を、このときふたたび経験した。海は私のまえに、無限の水のあつまりとしてあった。私は失望した。このとき、私は海さえも失ったのである。

問七

傍線部⑦の時の筆者の状況はどういうものか。最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 念願の海を目の当たりにし、ついに自由になって故国へ帰還することができると、戦慄に似た歓喜が背すじを走った
- 2 船から見下ろす海は、収容所の中で想像していた美しい海とは異なり、単なる水滴の集合でしかないと感じられ、失望した
- 3 渴仰の対象であった海が水のあつまりでしかないものへと変貌し、失望と虚脱の感覚が名状しがたい重さとして実感された
- 4 突然解放されたので、海から再びロシアの大地へ連れ戻されて、重労働を課せられるのではと、不安を抑えられなかった

十二月一日夜、船は舞鶴へ入港した。⑧そこまでが私にとつて過去だったのだと、その後なんども私は思いかえした。戦争が終わったのだ。その事実を象徴するように、上陸二日目、収容所の一角で復員式が行なわれた。昭和二十八年十二月二日、おくれて私は軍務を解かれた。

(石原吉郎『望郷と海』による。ただし本文の一部を省略した)

問八

傍線部⑧はどういうことか。最も適切なものを次の中から選
び、その番号をマークせよ。

- 1 ソビエトに抑留された者にとって、抑留地から帰還するま
で戦争が続いていたということ
- 2 故国へ戻ってから初めて、止まっていた時間が明るい未来
へ向けて流れ始めたということ
- 3 日本にいた頃ではなく、ロシアで過ごした時こそが過去と
呼べるものになったということ
- 4 海を渡り終えてから、戦中の苛酷な生活が遂に忘れ去ら
れるべき過去となったということ

令和4年度 一般入試 前期A日程 [1月29日実施問題] 解答と配点

国語「1/29」(法学部・経済学部・経営学部・文芸学部・総合社会学部・国際学部・情報学部・農学部・生物理工学部・産業理工学部・短期大学部)

問題番号	〔一〕													〔二〕								〔三〕							
解答番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	1	2	3	4	5	6	7	8	1	2	3	4	5	6	7	8
正解	2	4	2	3	1	3	3	4	3	4	2	1	4	4	3	2	2	2	2	1	3	1	3	3	3	3	2	3	1
配点	2	2	2	2	2	4	4	4	4	3	3	4	4	3	4	3	4	4	4	3	5	3	4	4	4	4	3	4	4